

規律・訓練的社会

—— フーコーの権力の技術論 ——

軍 司 敏

序 権力についての問い

あらゆる政治理論は権力の問題に関心を持つ。権力についてはふたつの問いがたてられる。ひとつは、権力はどのような仕方で機能するかという問いである。さしあたって権力を、個人 A のもつ〈個人 B をして、他の仕方では決して為さなかったであろうことを為させしめる〉能力とするならば、権力の行使される過程は決して単純ではない。それには奇妙で予期しえぬ、あらゆる種類のやり方がある。従って、権力に関するひとつの問いは、権力はどのような仕方で機能するかである。フーコーの関心を引くのはこの問いである。もうひとつの問いは、ロック、ホッブス等による伝統的でリベラルな政治理論、いわゆる社会契約論に見られるもので、何が権力の機能を合法的にするかである。社会契約論は公式の統治権力の存在しない自然状態を想像し、ひとはいかなる理由によって自然状態を離れるのかと問う。そして、己の生命と財産を維持するという利益のために、自然状態を離れ、統治権力を樹立し社会を作ることと同意すると語る。こうして樹立される権力は、社会のメンバーの共通の同意の結果であること、その目的が社会のメンバーの共通の利益を保証すること、この2点の故に合法である。

自由主義的な政治権力の合法性についてのこのような説明が不十分であることは、社会契約論の内部でも気づかれていた。ミルは社会によってそのメンバーに対して非公式に行使される権力に頭を悩まし、不人気な見解が社会によって制限されるなら、それは不幸であろうと信じた。しかしたとえ少数者や個人の見解を法が尊重したとしても、ひとは世論の自由な思想に対してもつ有害な効果に注意を払わねばならない。しかし、民主主義においては多数者が支配階級である。少数者の見解

や生活様式への多数者による否認に抗して、法を制定する手段はない。かくして文化や生活様式と言った領域には、法的権力に従わない一種の権力が存在する。ミルの議論に欠けていたのはこの2種類の権力の形式がどのように相互に作用しあうかである。

また、伝統的でリベラルな政治理論によれば、権力は中心に位置する最高権力 (*souveraineté* 主権) のうちに宿り、あらゆる権力の作用はこの源泉に遡って起因する。従って最高権力は自らの働きのすべてを説明する責任主体でもある。このような権力を統制するために「同意」の観念が用いられて、権力の主体とその作用が記述される。もし権力が不可視でその位置が同定されないなら、権力の働きに対する同意はあり得ないだろう。こういったコンテキストで「権利」「義務」が論じられる。「強制」は「同意」の反対であって、これも最高権力の存在に結びつく。権利が侵犯され、力が不適切な仕方で行使されるなら、今や非合法になった権力に反抗する力を何処に向けるべきかは明らかである。この政治理論の説く権力は「同意」「強制」の二元性を軸として働く。従ってこの形式をとる権力には、禁止、制限等消極的な観念が結びつく。

ところで、権力はどのような仕方で作用するかを問題にするフーコーは、「我々の社会のように、権力の様々な機関がかくも多く、その典礼がかくもはっきりと見え、その道具も最終的にはかくも確実な社会において、つまり権力の微妙且つ精緻なメカニズムに関しては他のいかなる社会よりもおそらく創意工夫に満ちていた社会において、何故このように、権力を禁忌という消極的で痩せ細った形でしか認めない傾向があるのか、また、何故支配の仕組み (*dispositif*) を禁止する法の手続

きにまで引き下げようとするのか。」⁽¹⁾と問い、17、18世紀に重要な現象が生まれたと説く。それは、「〈高度に種別的な手続き上の技術、全く新しい道具、全く異なる装置〉をもつ権力の新しいメカニズムの出現、あるいはむしろその考案である。」しかも「この権力の新しいメカニズムは、私の信じるところでは、絶対に最高権力の諸関係とは両立しない。」⁽²⁾ 規律・訓練的な権力の出現である。かかる状況を踏まえて、フーコーは語る。「我々が必要とするのは、主権の問題をめぐる構成されたのではないような、また、法と禁止の問題をめぐる樹立されたのではないような政治哲学である。我々は王の首を切り落とす必要がある。政治哲学においては、今なおこれが為される必要がある。」⁽³⁾

本論文は、フーコーの問題意識を上述のように捉えて、『監獄の誕生』を手がかりとしながら彼の権力の技術論の一端を論じたものである。

I 身体刑

ルイ15世の殺害を企てたダミャンは1757年に公開の死刑に処せられた。彼は処刑台の上で、胸、腕、腿、脹ら脛を灼熱したやっことで懲らしめられ、その右手は国王殺害を企てた際の短刀を握ったまま硫黄の火で焼かれ、やっことで懲らしめられた箇所には溶かした鉛等が浴びせられる。次いでその身体は四頭の馬で四裂にされる。しかも四裂は首尾よくいかず馬を増やし、最後は死刑執行人の助けを借りて行われる。死刑としての身体刑は単に死を与えるのではない。ダミャンの例に見られるように、それは生命を苦しみのなかに留め置く技法 (art) であって、生存の停止以前に「最大限に精妙な苦悶」を与える必要があるのだ。かくして、身体刑は、比較し段階をつけることのできるある量の苦しみを生み出す技術 (technique) に支えられる。「身体刑は苦しみについての量中心の技法全体に根拠をもつ。」⁽⁴⁾ しかも、身体刑に伴う痛みには法律的な基準 (code juridique) があり、刑罰は細則によって計算される。鞭打ちの回数、刑の責め苦の時間、身体毀損のタイプ (手足の切り落とし、舌や唇の突き刺し等) の裁判所による組み合わせが、具体的刑罰を多様にする。かくして、身体と刑罰に関する詳

細な知 (long savoir physico-pénal) が必要とされる。

さて、身体刑を課せられる身体は処刑される以前に、法律に則って犯罪の真理を明らかにしなければならない。犯罪訴訟の手続きは秘密保持と文書中心主義であった。被告人は判決まで訴訟手続き書類に近づくことはできず、告発者が誰であるかも知り得ない。司法官が唯一とりて犯罪の真理を組み立て、裁判官はその真理を書類や文書の形式で受け取る。裁判官にとってはこれらだけが証拠である。これらの証拠は例えば、完全な証拠と半ば完全な証拠、副次的な証拠等といった具合に、その性質と効力が明確に規定されている。それはひとつだけでも効力を持つ (完全な証拠はひとつで有罪の判決をくだせる等) が、正確な計算技術に基づいて組み合わせることもできる (半ば不完全な証拠ふたつで完全な証拠、副次的な証拠をいくつか併せて完全な証拠等)。かくして、罪の真理を確証するにはいくつかの規則があり、証拠を用いての論証の仕方のモデルも作られる。「合法的な証拠のこのシステムが、刑事上の真理を複合的な技法の結果とする。」⁽⁵⁾ ところで他面からみると、この証拠のシステムは司法官にとって厳しい制約 (contrainte) である。「司法上の証拠に関するこれらの形式的な制約は、知に基づく絶対的で排他的な権力の内的規制の様式である。」⁽⁶⁾ 知と権力は内的に結びつき、互いに呼び求めあう。

以上のように秘密保持と文書主義で、且つ、証拠を組み立てるために厳密な規則に従う刑事上の証拠調べは、被告人なしで犯罪の真理を生み出す機械装置 (machine) である。従って、たしかに権利上では自白を必要としないが、この訴訟手続きは自白を求める傾向にある。何故ならこの証拠調べが被告人に対して効果的に勝利を収めて、犯罪の真理が完全にその権力を振るうための唯一の仕方は、犯罪者が自分の犯罪を自分の責任に帰して、証拠調べによって組み立てられた事柄に自分から署名することなのだから。「犯罪主体の行為である自白は、責任によって裏打ちされしかも口頭で述べられるから、文書主義と秘密保持の証拠調べを補足する一片の書類である。」⁽⁷⁾ 自白が犯罪の真理を儀式的に完成する。拷問すなわち真理を強引に入手するための身体的暴力は、自白をえ

るためのひとつの手段である。古典主義時代の犯罪司法においては、例えば、半ば完全な証拠がひとつある場合半ば有罪である。容疑をかけられた者は無罪ではなく、常にある種の懲罰を受けるべきである。かくして、一定の証拠が集められると処罰を開始し、この処罰を通して新たな証拠を集めることは合法である。拷問は刑罰であると同時に証拠調べでもある。証拠調べでもあるのだから、拷問はきちんと規定された手続きに従って行われる。拷問の時間、使用される道具類等が細心の注意をもって定められる。近代の拷問と異なって古典主義時代のそれは、たしかに残酷 (cruel) ではあるが野蛮 (sauvage) ではないのだ。「18世紀には司法上の拷問は、真実を生み出す祭式と処罰を科す祭式がセットになっているという、奇妙な経済策のなかで機能する。」⁽⁹⁾

さて、このような手続きを経て犯罪の真理が明らかになり、刑が確定すると、その執行は公開される。処刑台の上での君主の身体と罪人の身体との対決が公開される。古典主義時代の法によれば、法律違反 (infraction) は法を布告し主張する者の権利に対する侵害である。犯罪はそれによる直接の犠牲者以外に、君主 (souverain) を傷つける。法律違反は、法が君主の意志である以上君主を人格的に、また、法の力が君主の力である以上君主を身体的に傷つける。そこで、君主を軽んじた犯罪に対して君主は報復 (vengeance) し、万人の面前で無敵の力をふるう。即ち、法律違反者は君主の人格そのものを傷つけたのだから、君主の人格 (あるいは君主が少なくとも自分の力を委ねた人々) が被処刑者の身体に掴みかかって、うち負かし痛めつけ、彼の身体に烙印 (marque) を押す。処刑の公開の目的は君主の荒々しい現前を万人に、被処刑者の身体の上で感じ取らせることである。確かに、軽罪によって起きた損害の賠償はその損害と釣り合いがとれていなければならないし、判決は公平であらねばならない。しかし君主を軽んじた犯罪の場合には、刑罰の公開は法を犯した臣下と全能の君主とのあいだの力の不均斉を最大限浮かび上がらせることが主たる狙いである。身体刑は司法 (justice) を立て直す (rétablir) のではない。それは権力を再活性化する (réactiver) する機能をもつ。かくして、「身体刑

の装置全体は、刑罰の政治的機能のなかに刻み込まれていた。」⁽⁹⁾ 身体刑は恐怖の政治学であった。

身体刑は被処刑者の身体を、君主による制裁の適用点に、権力の示威の投錨点にすることによって、双方の力の不均斉を強調する機会に化す。公開される身体刑の儀式においては、中心人物は民衆である。見せしめは、どんな小さな法律違反でも処罰される危険が大きいという意識を民衆にもたせるだけでなく、罪人に激高する権力の姿をみせることによって、恐怖の効果を狙う。しかしこうした「恐怖の情景 (scène terreur)」は、他方では、処罰する権力への拒否、反抗の機会となる。とりわけこういった事態は、犯人が金持ちや身分の高い者である場合には比較的軽い刑罰に処せられるような種類の犯罪で、犯人が下層民だという理由で死刑に処せられる場合に生じる。社会的階級の違いによる刑罰の差別は民衆に、自分たちは刑罰を受ける人に近いと感じさせ、自分達もまた均衡も節度ももたぬ合法的暴力 (violence légale) によって脅かされていると感じさせる。この場合、群衆が処刑台の周りに集まるのは、死刑囚が裁判官を、法を、権力を、宗教を呪う声を聞くためである。こうして罪人が英雄視され、権力者が愚弄される。処刑の公開のもつ、こうした両義的な効果を前にして、権力者の側に政治的な恐れが生じる。

II 処罰の都市

1 身体刑への批判

身体刑、それは王の暴力と民衆の暴力を支える形象 (figure) である。この同じ暴力のなかに、改革主義者達は王と民衆の双方の側で合法的な権力を超えているものを見る。王の身体刑による死刑囚への報復は民衆の報復を呼ぶ。圧政と反抗は互いに呼び合う。かくして今や、犯罪司法にとって必要なことは、報復ではなく処罰する (punir) ことである。

18世紀後半になると、民衆に対して恐怖感を刻印することを狙う身体刑に対する抗議は至る所に見いだされる。「刑罰を緩め罪に応じたものにしていただきたい。……人間性にもとる身体刑を廃止していただきたい。」⁽¹⁰⁾ 「懲罰 (châtiment) はこう言って良ければ、身体よりもむしろ精神 (âme) に。」(マブリー)⁽¹¹⁾ 身体刑なき懲罰の必要性は心

情の叫びとして、怒りを発した自然の叫びとして表明される。どんな凶悪な殺人者といえども、少なくともひとつのことが尊重されねばならない。即ち彼の人間性である。こうして人間尊重の観点からの刑罰の緩和が語られる。ところで、ここで語られる「人間尊重」とはいかなるものであろうか。それを理解するためには、刑罰の改革を次のような歴史的過程のなかで把握する必要がある。すなわち、この時期には、犯罪はその荒々しさを失っているように見える一方、それに応じて、処罰は権力の介入が多様化するという理由でその激しさを失うという二重の運動が見られる。実際、流血の犯罪が減少し、所有権に対する侵害が暴力的犯罪に取って代わる。「17世紀の犯罪者は『疲れ切り食べ物に窮し、その場限りの、かっとう腹を立てる人々、収穫期に先立つ夏場の犯罪者』であるが、18世紀の犯罪者は『計算のうでで立ち回る、悪賢く狡猾な連中であって、社会の周辺部の人々』」⁽¹²⁾である。このように違法行為が流血の犯罪行為から詐取的な犯罪行為へ、多数者の犯罪行為から周辺部の犯罪行為へと移ったことに応じて、刑罰の実務を整備拡大する必要が生じる。以前には司法によって安易に放置されていた小さな非行 (délinquance) も取り締まりの対象になる。一般的に言えば、生産力が発達し、富が増大し、所有関係に法律的、道徳的なより高い価値が与えられるのに応じて、一層厳密な治安手段、住民に対する監視、逮捕するための様々な情報が必要になったのである。

改革主義者の伝統的司法に対する批判的言説は上述の二重の過程に対応する。①彼らは権力の強化化、あるいは、弱体化を批判するのではない。たしかに彼らは懲罰の行き過ぎを批判する。しかし、この行き過ぎは処罰権の乱用に結びつくよりも、むしろ裁判の変則性 (irrégularité) に結びつく。多種多様な裁判の審級 (国王裁判、領主裁判等) があり、それらは不連続で重なり合い、ピラミッド型になっていない。そこから、下級の裁判権のなかに過剰な権力が存在し、正常な権利としての上訴を不問にしたり自由裁量による判決を勝手に執行するといった事態も生まれる。また逆に、過剰な裁判の審級の重なり合いは軋轢を生み、裁判の欠落を生む。かくして、改革主義者の批判の主眼点は権力の円滑さを欠く司法上の経済策で

あって、権力の弱体や残酷さではない。②伝統的司法は君主に華々しい権力を与える一方で、民衆の側には恒常的な違法行為を残しておく。すなわち、旧体制下では各種の社会層のそれぞれに、小さな違法行為に対する黙認の余地が残されていた。例えば、共同放牧権、枯れ木拾い等の違法行為は農民層の生活にきわめて必要であったから、司法の経済策のなかに黙認という形で組み込まれていた。しかし所有関係に高い価値が与えられるようになると、それらは財産に関する違法行為になる。取り締まる必要が生じる。かくして、刑罰の改革は、君主のもつ超権力 (君主の人格に結びつく権力) に反対する闘いと民衆の下層権力 (infra-pouvoir) のもつ既得の黙認されている違法行為に対する闘い、このふたつの闘いの合流点で生じた。君主の種々の特権を非難することは、同時に民衆の違法行為に対する攻撃でもある。要するに、改革主義者の批判は伝統的司法の経済策に向けられた。かくして、司法の改革を生み出した事の成り行きは、新しい感受性の誕生ではなく違法行為に対する別の政治である。処罰する権力の新しい経済策が求められる。それは君主の無制限な権力と民衆の用心深い違法行為、この両者を制限するような刑罰のシステムである。「刑罰において尊重されるべしとされる《人間》、それはこうした二重の限定 (délimitation) に与えられた法律的並びに道徳的形式である。」⁽¹³⁾ つまり、君主の権力のおよぶ範囲と民衆の下層権力のおよぶ範囲のそれぞれを測定し境界を定める「尺度としての人間 (homme-mesure)」である。

2 処罰する権力の新しい経済策

刑罰改革の理論の原理的な点は社会契約の一般的な理論のなかに表明されている。改革主義者達は、社会契約論に基づく処罰の都市を構想する。個人は法律違反により社会全体に対立し、社会の敵になる。しかも、彼は社会の内部において社会を攻撃するのだから、敵以上の悪者つまり裏切り者である。社会全体が彼を罰するために立ち上がる権利を持つ。処罰権はこのように構成される。そのうえ契約論によれば、社会の各メンバーは様々な法とともに、彼を処罰する恐れのある法も最終的には受け入れていると見なされるのだから、裏切り者に対して社会が絶対的権利を持つのは当然

である。かくして、処罰権は君主の報復から社会の擁護へと移ることによって一層強力になる。君主の恐ろしい超権力の二番煎じにならないためには、刑罰を軽減するための原理が必要である。刑罰軽減の原理は、先に触れたようにまず最初は、心情の言説として身体の叫びとして表明される。それはまるで、刑罰の合理的な基礎を見いだせぬ無力さを抒情的な精神が補っているかのようである。しかし、実際には、この感受性への依存は計算の原理を携えている。何故なら、処罰が社会の擁護を目差すからには、関心事は犯罪の予防になり、それに応じて顧慮すべき身体・苦痛・心情も犯罪者のそれらではなく、裁判官や見物人のそれら、即ち犯罪者に対して団結する権力 (*pouvoir de s'unir*) を行使する権利をもつ人々のそれらになるのだから。言い換えるなら、配慮すべき事柄は犯罪の社会に及ぼす影響である。ところで、ある犯罪の社会への影響はその残忍さ (*atrocité*) に必ずしも比例するわけではない。残忍な犯行が、皆が大目に見て真似たくなるような犯行よりも社会への影響が小さいことはしばしば見られる。「刑罰を犯罪との関係でなく、その起こる繰り返しの関係で計算」⁽¹⁴⁾ し、犯罪自体の影響と刑罰のそれとを調整すること、これが必要とされる。処罰は効果 (結果) に関する技法になる。犯罪の予防のための見せしめの効果、これは処罰権のありふれた正当化のひとつである。しかし、身体刑の場合との相違は、懲罰とその華々しさ (度をこした - *démésure* - 刑罰による恐怖) のひとつの効果として考えられていた予防が、今や懲罰の原理に、また、懲罰の正当な釣り合いを測る尺度 (*mesure*) になった点である。かくして、刑罰において尊重されるべきとされる人間性とは犯罪者の奥底に潜むすべての人に共通な人間性ではない。「《人間性》とはこの経済策に、また、その綿密な計算に与えられた敬称である。」⁽¹⁵⁾

刑罰の新しい経済策のもとでは、懲罰の原理は犯罪の予防である。犯罪は利益をもたらすが故に行われる。従って、犯罪を予防するためには、罪人にとって「懲罰の引きおこす損害の方が罪人が犯罪から手に入れた利得を上回るだけで十分である。」⁽¹⁶⁾ 要するに、犯罪の観念に、〈犯罪のもたらす利益よりも刑罰による不利益の方が、必ず、大きいという〉観

念が結びつけばよい。「懲罰の核心において、苦痛 (*peine* 刑罰) となるものは苦しみの感覚でなく、痛さ・不快・不便の観念である、—— 苦痛 (刑罰) の観念のもたらす苦痛。」⁽¹⁷⁾ 例えば痛さの記憶が再犯を妨げるのだ。従って、処罰の技術は道具として、痛さそれ自体でなく痛さの観念を用いるべきである。刑罰は身体でなく表象を利用すべきである。こうして刑罰 (苦痛) の主体としての身体は排除される。しかし表象の客体としての身体、つまり、見せ物 (*spectacle*) の構成要素としての身体は必ずしも排除されるわけではない。何故なら、肝腎なことは再犯の防止とともに、犯罪が利益にならないという観念を社会全体に広めることによって模倣犯を予防することなのだから。かくして例えば、放浪の罪は怠惰の故に、つまり労働への嫌悪の故に生じるのだから、公共の土木事業の刑に処するのがよい。何故なら、この刑罰は放浪の背後にある怠惰を示す表徴 (*signe* 記号) になり、犯罪の予防のために役立つのだから。こうして観念を用いる刑罰は、自らの効果を計算する記号 (表徴) の技術によって支えられる。この技術によって、処罰の公開は開いてある本のように読まれる。ひとびとは処罰のなかに君主の現前でなく法を見る。処罰を通じて法が再活性化される。公開の場で受刑者の身体に烙印を押す必要はない。「処罰の舞台 (*théâtre punitif*)」の上で、懲罰の表象が社会の全構成員に示されることで十分である。かくして、初めは抒情的な響きをもってマブリーによって語られた、〈「身体ではなく精神を」刑罰の対象に〉との言葉はその合理的基礎を見いだす。この言葉は権力の技術の相関物であり、この場合の精神とは表徴 (記号) と表象の働き (*jeu*) である。

ところで、「懲罰の現実 (*réalité*) が、悪事の現実の帰結として、それと一続きになっていないなら、人々の心の中で、どのようにして悪事の観念と懲罰の観念を結びつけるべきであろうか。」⁽¹⁷⁾ 両観念を結びつけるためには、犯罪の真理を明らかにすることによって、悪事の現実を確立しなければならない。犯罪の真理を明らかにするために従来の犯罪司法のシステムは、先に触れたように、完全な証拠、不完全な証拠等を組み合わせて計算するという方法を用いた。しかもそこでは拷問による自白も証拠として採用された。今や、処罰権が社会

全体に属するからには、このような法律に固有な証拠を捨て、万人に承認されるような方法によって、犯罪の真理を明らかにすべきである。理性を用いての論証がその方法である。拷問に関して言えば、容疑者は半ば有罪といった観念は捨てられるべきである。こうして論証された犯罪の真理に基づいて、個々の法律違反の性質が明らかにされ罪科が決められる。こうして作られる法体系（code 記号体系）は、法の沈黙につけ込んで懲罰を免れる人がいないようにするために、違法行為の全領域を覆い尽くさねばならない。そこで、あらゆる違法行為がそのタイプに従って集められ種へと分類され、犯罪の一覧表が作られる。更に、この表に正確に対応する形で刑罰に関する一覧表を作り、それに従って刑罰を定める。このふたつの表を用いることによって刑罰の恣意性は排除され、同じ法律違反に同じ刑罰が科せられる。さて先に見たように、新しい経済策のもとでは犯罪の予防は、処罰の「効果 - 記号（表徴）」によってなされる。これが事態を複雑にする。同一の懲罰の観念が、すべての人に同じ影響力もつことはない。例えば罰金刑は金持ちにとっては恐ろしくないし、また、貴族の犯罪は下層民の犯罪よりも社会にとって一層有害である。犯罪者の身分によって社会への影響は異なる。個々の犯罪者への刑罰はこの点も考慮せねばならない。これは刑罰の個人化の問題である。「たしかに、この個人化は権利（droit 法）の理論の観点から見れば、… 法体系化（codification 記号体系化）の原理に根本的に対立する。しかし、処罰する権力の経済策の観点、及び、〈社会全体に … 行き過ぎも欠落もないようなかたちで正確に調整された処罰の記号を行きわたらせようとする〉技術の観点にたつならば」、「〈犯罪 - 懲罰のシステムの法体系化〉と〈犯罪者 - 処罰のカップルの調節作業（刑罰の個人化）〉はセットになって進み、互いに他を呼び求める。」⁽¹⁸⁾ こうして、「理論上、というよりも夢想としては、懲罰と犯罪の二重の分類法が、問題（どのようにして、不動な法を独自の個人に適用すべきか）を解決することができる」はずである。

上述の刑罰の個人化は犯罪の社会への影響という点から論じたのだが、懲罰のもうひとつの狙いは再犯の防止、つまり犯罪者の矯正である。刑罰

は法律違反者を矯正して、社会へ復帰させる手続きでもある。この点から見ても、刑罰は各個人の独自性に従って調節される必要がある。そのためには、彼の邪悪さの程度や彼の意志の質を考慮し、犯罪へと向かう傾向性（disposition 資質）を変えねばならない。かくして、けんか沙汰を裁く（punir）、しかしそれを通じて彼の攻撃性を裁く。強姦を裁く、だが同時に彼の背徳性を裁くのである。要するに、犯罪そのものでなく、犯罪の背後にあるものを裁く必要が生じる。「いま輪郭を見せ始めているものは、〈法律違反者自身に、彼の性質（nature）に、彼の生活と思考様式（mode de vie et de penser）に、彼の過去に〉関わる調節作業（modulation）であり、もはや彼の意志の意図（intention）ではなくその質（qualité）に関わる調節作業である。」⁽²⁰⁾ ここでその下図が描かれ始めた矯正のための刑罰の個人化という問題に、心理学的知が関わるようになるのは後のことである。今問題になっている18世紀末においては、ひとびとは当時の科学的モデル、すなわちリンネの分類法に従って上述のふたつの一覧表を作ることによって対処しようとした。

以上要約すれば、刑罰の改革を生み出した事の成り行きは、身体刑を中心とする従来の権力の経済策が行き詰まり新しい経済策の必要性が生じたこと、このことである。具体的には、君主の超権力と民衆の抜け目のない違法行為、この両者を取り締まる必要が生じた。この要求に沿う形で、改革主義者は「処罰の都市（cité punitif）」を構想した。それは社会契約論の枠組みのなかで、①万人に共通の理性を通じて犯罪の真理を明らかにすること、②懲罰の手段として苦痛の感覚でなく苦痛の観念を用いること、すなわち、刑罰の主体としての身体を排除し、表象の客体としての身体を利用すること、この二点を軸としたものである。しかし同時に、これは刑罰の個人化という新たな問題を生む。刑罰が違反者を矯正して社会へ復帰させる手続きである以上、それは個々の違反者にふさわしい刑罰に調節されねばならない。こうして個々人を把握するために、個人への監視と情報収集の必要が強化されていく。この刑罰の個人化の問題は、近代の刑法のなかにきわめて重い重荷となって残るだろう。

3 強制を中心とする制度

改革主義者は投獄をある種の軽罪（自由に関わる罪）に制限し、それ以外の犯罪への刑罰として監獄を使用することを批判する。何故なら、投獄という画一的な刑罰は、タイプ別に分類された犯罪のさまざまな種に対応する力を持たないから。ところが、「またたくまに監禁が懲罰の本質的形態になった。」⁽²¹⁾ 監獄という画一的装置が改革主義者が夢想していた処罰の装置に取って代わる。この交代には、古典主義時代に形成された拘禁施設（アムステルダムの研磨の獄舎、ゲントの牢獄、イギリスにおける矯正を中心とする施設等）が重要な役割を果たしたことは疑いえない。これらの施設が処罰としての投獄のモデルになったのである。

改革主義者とこれらの施設は、懲罰の期間、性質、軽重は個人の性格に合わせて、またその性格に含まれる他者への危険に合わせて調整されねばならない、という点では一致する。両者は刑罰改革の理論的基礎においては一致する。しかし、各個人に適した仕方で矯正する技術を規定しようとすると不一致が現れる。まず改革主義者の技術論とはどのようなものか。言い換えるなら、どのような道具を使って、どのような技術によって、どのような個人を作ろうとするのか。先に触れたようにここでは、刑罰のもたらされる地点はさまざまな表象（利害、快・不快等の表象）である。この表象を活用する道具も他の表象、より正確に言えば、〈犯罪・懲罰〉のようにカップルになった観念である。カップルになった観念は公開の処罰の舞台を通じて万人に知らされ、社会全体が懲罰の観念を犯罪の観念の記号（表徴）として受け取る。こうして表象の働きについての記号の技術論が組み立てられる。各個人の矯正は記号のシステムとそれを通じて社会に行きわたった表象の働きを強めることによって行われる。法律違反者は矯正を通じて権利の主体（sujet de droit）としての資格を再獲得し、市民として社会に復帰する。他方、拘禁施設のいくつかに見られる、矯正中心の刑罰（pénalité corrective）の装置は全く別の仕方で働く。ここでは、刑罰のもたらされる地点は身体と精神、但し記号と表象の働きとしての精神ではなく、習慣の座である限りでの精神である。処罰は行動の原理としての身体と精神に介入する。

従って使用される道具は表象ではなく、強制的諸形式（forme de coercition）であり、繰り返し適用される拘束の諸図式（schéma de contrainte）である。矯正施設で人々が強化し流布させるのは訓練（exercice）であり、訓育（dressage）である。訓練と訓育を通じて個人の行動は操作される。人々がこの矯正技術のなかで再構成しようと努めるものは、社会契約論の説く市民と言うよりも、むしろ〈服従する主体、即ち、習慣や規則や命令に従って自己を主体化する個人（individu assujetti à）〉と〈個人の周りで個人に絶えず働きかけるある権威（autorité）〉である。矯正中心の刑罰の装置は、何らかの権力の一般的であると同時に細心の形式に従って服従する主体を形成するのであって、社会契約上の法的主体（sujet juridique）を再構成するのではない。

さて、矯正施設で行われる強制的諸形式を用いての、善行の訓育、習慣の獲得、身体拘束は、処罰される者と処罰する者の特殊な関係を含む。①この関係は例の見せ物としての処罰を無用にするだけでなく、それを排除する。処罰を司る役人はいかなる第三者も妨害しえぬ完全な権力を行使する。権力の行使過程における秘密への絶対的要請（impératif du secret）である。従ってまた、②処罰技術は相対的に自立する。その技術は自らの機能・規則・知を所有し、規範を定めて結果を左右する。正規の司法権からの自立である。（これは改革主義者の説く、①全市民を社会の敵の懲罰に参加させる、②処罰する権力の行使を法律に一致させるという理論と政策に対立する。）かくしてここでは、処罰する権力は、秘密の保持と独自の技術に基づいて罪人の身体を入念に掌握し、〈権威と知〉に基づくシステムによって、彼の動作と行為をある枠にはめ込み管理する。罪人をひとりひとりを立ち直させるための整形手術である。「処罰の都市」を改革主義者が構想したとするなら、ここにあるのは「強制を中心とする制度（institution coercitive）」である。

こうして人々は18世紀末に、処罰する権力を組織する三つのやり方、三つの技術論に直面する。その各々はそれぞれ次のような文言によって構成される。①古い君主権に基盤をもつやり方。君主とその力、君主による報復、君主の身体と罪人の

身体の処刑台上での対決、身体への烙印 (marque)、民衆への恐怖の効果、打ち負かされる罪人、等。②改革主義者のやり方。社会体、社会の擁護、処罰の舞台、表徴 (記号) による民衆への効果、刑罰を通じて市民の資格を再び獲得する法律違反者、等。③今その下図が描かれ始めた「強制を中心とする制度」におけるやり方。管理装置 (appareil administratif)、訓練あるいは訓育、習慣という形で身体に残される痕跡 (trace)、強制に従って自己を主体化する個人、等。この三つのやり方を前にして、「またたくまに監禁が懲罰の本質的形態になった」という事態は、処罰する権力の行う強制を中心とする制度化の、社会全体への浸透・拡大を意味する。

Ⅲ 規律・訓練的な社会

1 ペストの町

ペストの発生に際してとられるべき措置は、17世紀の一規則によれば次の通りである。ペストの発生した町を封鎖し、その町をいくつかの地区に分け、各地区に代官を置く。各地区のそれぞれの街路にはひとりの世話人を置く。更に巡視隊を組織し住民を絶えず監視する。こうした監視を支えるのは絶えざる帳簿記入のシステムである。つまり、世話人から代官へ、代官から町役人への報告である。閉鎖され、細分され、各所で監視されるこの空間、個々人は固定した場所に組み入れられ、どんな些細な動きも取り締まられ、あらゆる出来事が記帳され、中断のない書記作業が町の中心部と周辺部を繋ぐ空間、要するに、権力が各個人を標的として上級機関から下級機関へと階層秩序的な仕方で行使され、各個人が生者と病者と死者に振り分けられるこの空間、これこそ規律・訓練的な配置 (disposition) のモデルである。ペストの招き寄せた事態とは、閉ざされた空間内部での、個々人の差異に注目する監視と取り締まり (contrôle) の組織化であり、権力の強化と細分化である。「法律家達は純粋な理論に従って権利と法を機能させようとして、想像上自らを自然状態においたが、統治家達 (gouvernant) は完全な規律・訓練 (discipline) が機能するのを見ようとしてペストの状態を夢見た。」⁽²²⁾ たしかにハンセン病も大いなる閉じ込めのモデルを提供した。

しかしこれはハンセン病者の社会の外への排除、即ち一方の集団と他方の集団の区分である。排除された集団の内部で個人化を行い、個々人に差異 (différence) をつけることは問題にならなかった。ところで、19世紀に固有なことは、ハンセン病者が住人であった排除空間に規律・訓練的な権力の技術を適用することによって、ハンセン病の図式とペストの図式を両立させた点である。それがパノプティコン方式である。それはハンセン病者をペスト患者として扱う。つまり、一方では排除された者に規律・訓練を適用する。ある基準 (norme 規格) に従って、各個人をその差異に注目して序列化する。他方で、序列化された人々のうちのある者を、ハンセン病の図式に従って、つまり二元論的排除のメカニズムに従って規格外として追放する。正常な者 (normal 規格にあう者) と異常な者 (anormal 規格にあわない者) への区分である。「ペストの恐怖故に呼び求められていた規律・訓練の仕組みは、異常者の測定と取り締まりと矯正を、自らの職務とする技術と制度の総体のおかげで機能する。」⁽²³⁾

ペストの町に基づく規律・訓練の図式 (17世紀半ば) とパノプティコンの図式 (19世紀初頭) との交代に関しては次のふたつの過程の歴史的な重なり合いを考慮する必要がある。ひとつは18世紀における流浪する人々の激増である。取り締まり操作せねばならない集団の量的尺度の変化である。もうひとつは生産装置の増大である。生産装置はますます広がり、複雑になりそして高価になる。従って収益性を高める必要が生じる。「規律・訓練の諸方式 (procédé) の発展はこのふたつの過程に、と言うよりはたぶん、両者の相関を調節せざるをえない必要性に呼応する。」かくして、人間の多様性と生産装置の多様化を調整する技術が出現する。これは、新しい経済策に属する権力技術である。そして、この権力技術こそ資本の蓄積を可能にし、西洋の経済的離陸上昇を実現すると同時に、人々の蓄積を管理するための方法を可能にし、従来の暴力的で費用のかかる権力の形式からの政治的離陸上昇をもたらしたのである。要するに、「く社会の諸力を一段と強めること——生産を増大し、経済を発展させ、教育を広め、公衆道徳の水準を高めること、つまり増大させること、

多様化させること〉が重要である」⁽²⁵⁾ ような歴史的状況があったのである。規律・訓練はこの事態に呼応する形で発展し、パノプティコンの図式になる。

かくして規律・訓練にはふたつのイメージがある。一方の極には、ベストの図式に基づく「規律・訓練 - 封鎖 (discipline - blocus)」がある。ここでは個々人の監視を通じて、悪の阻止、情報伝達の遮断等消極的な機能が目差される。要するに権力は禁止する。他方の極には、パノプティコン方式を含む「規律・訓練 - メカニズム」がある。これは、権力の行使をより速やかに、より有効にしつつ、それを改良する仕組みである。ここでは権力のメカニズムは社会の諸力を強化する。前者の例外中心の規律・訓練の図式から後者の一般化された監視の図式への動きは、17、18世紀における規律・訓練の仕組みの漸進的拡張であり、全社会におよぶその仕組みの多様化である。

2 パノプティコン方式

ベンサムのパノプティコンは、ベストの図式とハンセン病に基づく排除の図式を組み合わせた建築上の形象である。その原理は次のようである。中心部に塔を、その周囲に独房に区分けされた建物を配置する。光取りの窓の位置を工夫して、中央の塔にいる監視人からは独房内を完全に見ることができるが、独房の住人からは、塔は見えるが監視人は見えないようにする。監視人は常に見る主体であり、独房の住人は監視人も隣の独房の住人も見ることができないのだから、常に見られる客体である。さて、この原理から次の三つの結果が生じる。まず、①閉じこめられる者の密集し、うごめき、騒がしい群衆 (masse) といった状態が避けられる。例えば閉じこめられる者が受刑者である場合、集団脱獄の企てや相互の悪い感化を避けることができる、また子供の場合には、宿題の引き写しやおしゃべりや騒ぎを避けることができる。要するに、密集した人々のもつ「集合的効果 (effet collectif)」が排除される。こうして群衆ではなく、分離された諸個人の集まりが現れる。「看守の観点に立てば、群衆に代わって列挙し取り締まることのできる多様性が現れる。閉じこめられる者の観点に立てば、隔離され分離された孤立性が現れる。」⁽²⁶⁾ 次に ②閉じこめられる者は監

視者を見ることができない以上、現に今監視されているかどうかを知り得ない。しかし、塔は常に見えているのだから、監視される可能性は常に存在することを知っている。彼は現に今見られているものとして振る舞わざるをえない。言い換えるなら、彼は権力による強制を自分の責任で捉え直し、自発的にその強制を自分に働かせる。閉じこめられる者が、自ら、自分自身の強制服従 (assujettissement) の原理である。「この建築上の装置は、(現に今監視していなくても良いのだから) 権力の行使者から独立したある権力関係 (rapport de pouvoir) を創出し維持する機械装置 (machine) である。」⁽²⁷⁾ こうして閉じこめられる者は自らがその担い手であるような権力状況のなかに組み入れられる。権力は特定の場所に存在するのではない。それは至る所に存在する。この仕組みは重要である。権力はこの仕組みによって没個人化し、自動的に作用する。権力の原理はある人物のなかに存在するのではない。それは、〈その内的メカニズムによって、個々人が掌握される関係が生み出されるような〉、そういった装置の集合 (appareillage) のなかに存在する。この点はフーコーの権力論の独自の点なので少し詳しく見ておこう。規律・訓練的装置 (appareil) が完全であれば唯一の視線だけで十分であろう。しかし実際には中継者を必要とする。例えば学校のクラスには、「復習係」「忠告係」等、及びそれらの元締めなど一連の「係り」が監視の中継者として作られる。元締めが「他の係り」と縦断的に(上から下へ、また部分的には下から上へ) 関係するのは当然であるが、他の諸々の「係り」も相互に(横断的に) 関係しあう。こうした監視の関係は教育の運用 (pratique) の中心部に、〈外から持ってこられた一部品、あるいは、隣接する一部品〉としてでなく、〈内在的で教育の運用の有効性を多様化するメカニズム〉として組み込まれる。この監視関係のおかげで、「規律・訓練的権力は、それが行使される仕組みに内的に結びつく《統合された》システムになる。」⁽²⁸⁾ 規律・訓練的権力は多様で自立的で匿名の権力として組織される。たしかに監視が諸個人に基礎を置くことは事実だが、監視の機能は縦断的及び横断的な関係の網目の機能であって、この網目が総体を保持さ

せ、相互に支え合う権力の影響を総体の隅々にまで行きわたらせる。かくして、規律・訓練の階層秩序化された監視における権力は、ひとつの物として所有されるのではないし、また、所有権として譲渡されるのでもない。それはひとつの機械仕掛け (machinerie) として機能する。

上述のように、パノプティコン方式は、①によって、群衆を排除し分離された諸個人を相手にするのだから、各人をその独自性 (singularité) において把握することを可能にすると同時に、②によって権力を行使する主体の匿名化を可能にする。権力の原理が人物のなかに存在する社会では、権力の行使者が家系や彼の力を示す勲功や死後の記念碑等によって個人化される。それに対して上述の仕掛けをもつ社会においては、「権力が一層匿名的で一層機能的になるにつれて、権力の行使される相手の方が一層強く個人化される傾向をもつ。」⁽²⁹⁾ 最後に、パノプティコンの原理からのもうひとつの結果は、③パノプティコンは実験を行い、個人の行動を変えさせ、訓育する機械仕掛けでもあるということである。例えば犯罪や性格の違いに応じて、さまざまな処罰を試みて最も有効なものを研究する、労働者に各種の技術を同時に教えて最良の技術を調べる等である。パノプティコンの観察のメカニズムは人間の行動への理解を押し進める。「パノプティコンは人間についての実験を可能にする特権的な場所であり、また、人間から入手しうる変化を確実に分析するための特権的な場所である。」⁽³⁰⁾ パノプティコン方式が一般化された18世紀には、知の形成と権力の増加が円環的な過程によって規則正しく強化しあう水準に達する。知と権力のこの結びつきのおかげで、精神医学、児童心理学等、さまざまな人間の諸科学が規律・訓練的な境域 (élément) のなかで形成される。〈権力の諸関係 (relation de pouvoir) の細密化に基づく人間の諸科学の認識の拡大〉と〈新しい認識の形成とその累積のもたらす権力の成果の多様化〉、このふたつの過程が結びついて円環をなす。知と権力は互いに支え合う。

3 規律・訓練

規律・訓練的権力の目差す標的は「処罰の舞台」のうえで、表象として役立つ身体ではない。それは行動のふたつの原理 (principe de comportements)、

すなわち、身体と習慣の座としての精神である。言い換えるなら、身体的運動の経済や効果や内的組織である。ここでの強制の対象は表徴 (記号) ではなく身体力である。身体力を社会の諸力を一段と強めるために活用するための技法、それが規律・訓練である。この技法は単に身体の技術的意味での巧みさの拡大を目差すのではないし、また、単に身体隷属状態の強化を目差すでもない。この技法が目差すのは、同一のメカニズムのなかで身体が有用であればそれだけ一層それを服従的にする関係 (またその逆も成り立つ関係) の形成である。そのために、規律・訓練は身体力にふたつに分けて、一面ではその権力を素質・能力と化しそれを増やそうとする。しかし他面では、規律・訓練は身体エネルギーとそこから生じる強さ (puissance) の向きを変えて、それらを用いて服従関係を作る。こうして、「規律・訓練は (効用という経済関係での) 身体力を増加させ、(服従という政治関係での) この同じ力を減少させる。」⁽³¹⁾ ことを目差す。

先に見たように、パノプティコンは〈見る一見られる〉の関係を通じて、権力の行使者から独立した権力関係を保持する機械仕掛けである。ここでの視線は雑然とした無益な、あるいは危険な多数の人間 (群衆) を秩序づけられた多様性 (分離された個人の集まり) に変え、各個人をお互いの差異に注目して序列づけるのだから、階層秩序化する監視 (surveillance hiérarchique) である。そして、この視線の対象が行動のふたつの原理、即ち身体と習慣の座としての精神なのだから、それは有機体としての人間である。有機体としての人間の成長は段階的な生成過程 (genèse) を経る。従って人々が各個人に与える課題は彼の生成過程にあわせられるべきである。常に段階的な課題を人々が身体に課す技術、これが訓練 (exercice) である。従って、階層秩序化する視線の対象は動物精気の行き渡っているような身体、すなわち力学に属する身体ではない。それは訓練に属する身体である。訓練を通じて身体はその巧みさを増やし社会の諸力を強化する。しかし身体を訓練するだけでは十分でない。諸個人の力はその総和を超えるような仕方で合成 (composer) されるのが望ましい。ある機械仕掛けの成果が、諸個人のさ

さまざまな力を適切に連結 (articulation) することによって、最大となるような、そういった機械仕掛けが必要とされる。規律・訓練はこの要請に応える必要がある。かくして、規律・訓練は諸個人の力を合成する有効な装置を獲得するための技法でもある。命令のシステム、これこそが人間のさまざまな力を最大の成果を得るような仕方では他人の力に連結する。命令には説明の必要はない。唯、所定の行動を開始するための「信号による合図」でよい。それぞれの信号には否応なしに唯一の反応が結びつく。調教 (dressage 訓練) の技術である。この技術によって「規律・訓練を加えられる兵はどんな命令を下されても服従を始める。その服従は速やかで盲目的である。不服な態度、一刻の遅れも罪となろう。」⁽³²⁾ 不服従、反抗は許されない。かくして、「規律・訓練は、身体の力が最低の費用で、《政治の》力としては縮小され、役立つ力としては最大にされる場合の、統一的技術方式である。」⁽³³⁾

パノプティコンにおける視線はある種の裁判権も持つ。それは規格化を行う制裁 (sanction normaristrice) でもある。何故なら規律・訓練的なシステムの中心部では次のような形でささやかな刑罰のメカニズムも機能するのだから。規律・訓練は、法が空白のままに放置しておいた空間を〈碁盤目状に区分して監視し (quadriller)〉、比較的重要でないため大きな懲罰のシステムが見逃してきた行為を規定し罰する (réprimer 抑え込む)。例えば、学校や工場での遅刻や欠席や怠慢等である。つまり、規律・訓練の刑罰に属するのは規則違反、規則から離れること、逸脱である。こうして非画一的なもの (non-conforme) という明確でない領域が刑罰可能になる。規律・訓練はこうして取るに足らぬ事柄を処罰することが、万事に役立つようにする。兵士は所定の水準に達していなければ罪 (faute) を犯しているのであり、生徒は課題を成し遂げることができなければ罪を犯している。従って、処罰は一定の水準に達するよう訓練すること、生徒の場合は例えば練習問題 (訓練) を課すことである。「規律・訓練的な懲罰は逸脱を少なくするという機能をもつ。従ってそれは本質的に矯正的でなければならない。」⁽³⁴⁾ こういった規律・訓練的権力のもとでは処罰の技法

は五つの操作を用いる。①各人の行為・成績・行状を、当人を含む総体に準拠 (réferer) させること。総体が原理であって、この原理に基づいて諸個人の従うべき規則が作られる。②各個人をこの規則の観点から差異化すること。その際、この規則を最小の識閾 (seuil minimal) として、あるいは尊重すべき平均として、あるいは近づく必要のある最良のものとして機能させること。③個人の能力・水準を量として測定し、価値として階層秩序づけること、④価値として捉えられた尺度を通して画一性 (conformité) が実現するよう強制を働かせること。⑤すべての差異との関係での差異を示す境界線を引くこと、つまり、規格外 (anormal 異常なもの) を示す線を引くこと。要するに規律・訓練上の刑罰は、①原理としての総体に準拠して諸個人を比較し、②差異化し、③階層秩序化し、④同質化し、⑤排除する、これが規律・訓練の用いる五つの操作である。規律・訓練上の刑罰は規格化 (normaliser) するのだ。その刑罰は法律上の刑罰とはひとつひとつ対立する。何故なら後者の本質的機能は、〈原理としての観察可能な総体にでなく、法と条文の全体に準拠し〉、〈諸個人を差異化するのでなく、諸行為をある数の一般的カテゴリーのもとに種別化し〉、〈階層秩序化するのではなく、許容事項と禁止事項の二元的対立を働かせ〉、〈同質化するのでなく、有罪判決による分割を行う〉のだから。「規律・訓練的な仕組みは、《規格に基づく刑罰》を分泌したのであって、この刑罰は原理の点でも機能の点でも、法に基づく伝統的な刑罰には還元できない。」⁽³⁵⁾

IV 法と規律・訓練 (結論に代えて)

ブルジョワジーが18世紀に支配階級になった歴史的過程は、形式的には、平等主義の法律上の枠組みの設定によって、また、議会制と代議制の組織化を通じて庇護されてきた。しかし、規律・訓練のさまざまな仕組みの発展と一般化は、この過程の、他方の暗い斜面を構成している。原理上は平等主義的な権利のシステムを保証する一般的な法律の形式は、他面では、本質的に不平等で不均質な規律・訓練的権力のシステムによって裏打ちされていた。また、代議制のおかげで、形式的には万人の意志が統治権の基本的審級を形成するの

が可能になった反面、規律・訓練が力と身体の従順さを土台のところで保証した。さらに、契約が権利と政治権力の理念的基礎として構想された反面、パノプティコン方式は、強制のさまざまな技術を構成した。要するに、社会契約論の基本的な主張の下には、パノプティコンの様式が横たわっていた。「自由を発見した《啓蒙時代》は規律・訓練をも考案した。」⁽³⁶⁾

ところで、規律・訓練が人々を規格化する権力である限り、我々は規律・訓練のなかに一種の「反・権利 (contre - droit)」を見る必要がある。確かに表面的には、規律・訓練は権利によって定義される一般的な形式を個々人の独自の生存にまで延長し、諸個人をその一般的な形式に組み込むための見習い期間であるようにもみえる。しかし規律・訓練の役割は、政治権力における乗り越えがたい不均斉の導入、人間の相互関係の排除である。何故なら人間関係に関しては、規律・訓練は「強制の関係」を導入し、諸個人間に契約の義務とは全く異なる私的絆を創るのだから。例えば、いかに多くの規律・訓練の方式が実際には労働契約をゆがめ、相互関係を排除しているかは周知の通りである。また、政治権力の不均斉に関して言えば、「近代社会の、しかもそれを貫く階級支配を含めた系譜のなかで、規律・訓練は〈ひとびとが権力の再配分を行った際に従った〉法規範の政治上の反対物であった。」⁽³⁷⁾ のだから。法のシステムが普遍的規範 (norme) に従って諸個人に権利主体としての資格を与えるのに対して、規律・訓練に属する監視は個々人の独自性を把握して、ある規格 (norme) に従って階層秩序的に再配置し、極端な場合には規格外 (異常者) として特定の者から権利主体という資格を奪う。極端な場合までは進まなくても、ともかく、規律・訓練的権力がその不均斉な諸機能を働かせている場所では、それは権利の一時停止を行う。確かに、近代社会の普遍的法律主義は権力の行使に制限を加えるようにみえる。しかし、パノプティコン方式はある仕掛け、権力の不均斉を強化し多様にし、しかも権力の不均斉に対する制限を無用にするような仕掛けを、権利に逆らって機能させる。つまり、規律・訓練の用いるさまざまな方式は社会の、しかも社会の均衡の基礎そのものにありながらも、至る所で権

力の諸関係の均衡を失わせる。かくして権利をめぐっての政治闘争の下にはパノプティコン方式が存在する。このように規律・訓練は一種の「反・権利」であるにもかかわらず、我々は規律・訓練の用いるさまざまな方式に代わるものを見いだせないままにしている。つまり我々は規律・訓練を手放すことができないのだ。

注

(1) Michel Foucault. Histoire de la sexualité 1. Gallimard. p.113

(2) Michel Foucault. Two Lectures. Power / Knowledge. Pantheon books. p.104

(3) Michel Foucault. Truth and Power. Power / Knowledge .p.121

(4) Michel Foucault. Surveiller et punir. Gallimard. p.38 以下すべて同書からの引用なので頁数のみ記す。訳文は『監獄の誕生』新潮社、田村俣 (訳) を参考にした。

(5) p.41 (6) p.42 (7) p.42 (8) p.46 (9) p.53 (10) p.75 (11) p.22 (12) p.77

(13) p.91 (14) p.95 (15) p.94 (16) p.96 (17) p.99 (18) p.101 (19) p.102 () 内引用者 (20) p.102

(21) p.117 (22) p.200 (23) p.201 (24) p.220 (25) p.209 (26) p.202 (27) p.202~203 () 内引用者

(28) p.179 (29) p.194~195 (30) p.205~206 (31) p.140 (32) p.168 (33) p.223 (34) p.182

(35) p.185 (36) p.224 (37) p.225

Résumé

Toutes les théories politiques concernent au problème difficile de pouvoir. Deux questions peuvent être posées sur le pouvoir. La première question est celle-ci: 《Qu'est-ce qui rend le fonctionnement de pouvoir légitime ?》 Les théories fondées sur le contrat social s'intéressent à cette question. Ici, le modèle de pouvoir est juridique, centré sur le seul énoncé de la loi et le seul fonctionnement de l'interdit. Ce pouvoir est lié au fonctionnement négatif. La deuxième question est celle-ci: 《Comment fonctionne le pouvoir ?》 C'est à cette question que Michel Foucault s'intéresse. Il demande pourquoi on rabat les dispositifs de la domination sur la seule procédure de la loi d'interdiction, et il insiste sur l'émergence du nouveau mécanisme de pouvoir au XII^e et XIII^e siècle. C'est l'émergence du pouvoir disciplinaire qui rend les forces sociales plus fortes.

La discipline est le procédé technique unitaire par lequel la force du corps est aux moindres frais réduite comme force politique, et maximisée comme force utile. Les dispositifs disciplinaires sécrètent une pénalité de la norme si bien que le domaine indéfini du non-conforme est pénalisable. Ainsi la discipline normalise des individus et exclut l'anormal. Il faut voir dans les disciplines une sorte de contre-droit, puisque la discipline est le pouvoir normalisateur. Les Lumières qui ont découvert les livres ont aussi inventé les disciplines.

(2002年10月30日受理)